たばこの害から美しい海を守れ

高松で「世界禁煙デー香川フォーラム」

たばこのない「無煙社会」の実現を目指そうと、香川・タバコの害から健康を守る会（森田純二会長）は2日、高松市常磐町の瓦町FLAGでフォーラムを開いた。世界禁煙デー（5月31日）に合わせた啓発イベント。今年は瀬戸内国際芸術祭の開催年で、舞台となる美しい海を守るため、「瀬戸内海へ続くタバコの被害」をテーマに、吸い殻による海洋汚染を食い止める方法などを考えた。

午前中、医療関係者ら約30人が同市屋島西町の浦生海岸で清掃活動を行った。ごみの量は見た目では少なかったが、ペットボトル、発砲スチロールなどのほかに、ナイロン袋いっぱいの吸い殻を発見。中には、まだ歴史の浅い加熱式たばこのカートリッジやプラスチックなども10本以上含まれ、習慣的にポイ捨てが続いている実態が確認された。

午後からは瓦町FLAGで基調講演とシンポジウムを行い、たばこのフィルターの有毒性、海に与える悪影響などについて有識者が意見を交わした。

会場では肺年齢測定も実施。フォーラムは地元で活躍する音楽家によるミニコンサートで締めくくった。

出席者

◎基調講演
講師：石田 雅彦氏
司会：荒川 裕佳子氏（KKR高松病院 睡眠・呼吸センター長）

◎シンポジウム
シンポジスト：
森田 純二氏
（香川・タバコの害から健康を守る会会長、香川県予防医学協会顧問）
望月 友美子氏
（日本対がん協会参事＝禁煙促進・対がん事業開発）
森田 桂治氏
（NPO法人アーキペラゴ副理事長）
石田 雅彦氏
司会：森田 純二氏

【シンポジウム】

瀬戸内海を守るためにわれわれができること

子どもの提言力を育む　望月氏▼

森田純　日本の喫煙率は2割程度に落ちているにも関わらず、新しく販売された加熱式たばこが予想以上に売れている。この状況にどう対応すべきか。

石田　ニコチン依存症という病気があり、たばこをやめられない人が多い。加熱式たばこにもニコチンが含まれる。ニコチン依存症になると、朝起きてから寝るまで間欠的にたばこが吸いたくなり、それを何十年も続けてしまう。有害物質がごくわずかでも、何十年も体に入れてしまっている。加熱式たばこは紙巻きに比べて有害物質は少ないかもしれないが、ゼロではない。有害性が低減されても健康被害が低減されるわけではない。

望月　私はWHO（世界保健機関）や厚生労働省、国立がんセンターなどを経て現在、日本対がん協会でがんに関わる啓発活動のほか、喫煙者、受動喫煙、新型たばこなど五つのゼロを目指す「タバコゼロミッション」に取り組んでいる。たばこ問題は感染症対策のように個人防衛だけでなく、社会防衛をすべき。子どもたちには喫煙を始めさせないため、ワクチンとして「タバコフリーキッズ」という教育・提言活動を行っている。全国各地の自治体とコラボし、喫煙者のインタビューなどユニークなプログラムを提供。関わる大人が子どもから学ぶという逆の効果もある。

▲石田氏　加熱式も健康に悪影響

森田桂　私はNPO法人で海ごみ問題を担当している。海ごみで世界的に一番多いのはたばこのフィルター。次にペットボトル、そのキャップと続く。瀬戸内海で各団体が拾っている海ごみは全体の31％。53％は外海に流出している。きょうのテーマは瀬戸内海の被害だが、瀬戸内海のごみが世界に広がっている。

森田純　たばこのフィルターは最後まで残る。ごみとしても見つけにくい。捨てる人は捨てたら終わりと思っていることが多い。どうすべきか。

望月　フィルターは数えられるので環境モニタリングの一つの指標になる。また、喫煙者の中には普通のごみなら捨てない人でも、たばこだけ異常な行動を取る人が多い。捨てた吸い殻がどこに行くのかという想像力を養う教育も必要ではないか。

新型たばこ対策が課題　森田純氏▼

石田　喫煙者を少なくしていくと同時に、ポイ捨てが反社会的行為であることを声高に言うべき。大量の毒性のあるものが拡散する形で長い間、環境中に残ることを周知するしかない。

森田桂　漂着ごみ対策として行ったのが回収の促進。瀬戸内海の漂着ごみは2割の場所に8割あると言われるほど偏っている。だから、ごみの多いところを調査し、毎回そこを拾った。もう一つは発生の抑制。ただ、捨てないよう呼び掛けても捨てる人は捨てる。市民レベルの対策として続けているのが体験型の清掃活動に参加してもらうこと。単純にごみを拾うのではなく、中身を調査しながら拾う。そうすると、自分たちの生活が海に及ぼす影響に気付く。このような普及、啓発を広げていくことが重要だと感じている。

石田　千葉市は土木工事の入札の際、ごみ拾いなどの社会貢献活動の実績を記して提出した企業を優先的に入札に参加させている。行政が入札資格として社会貢献活動をしている業者に限定すれば、効果があるかもしれない。

望月　たばこは法律で禁止されていないが、本来は禁止されるべき毒性や依存性が高いもの。学校で禁煙教育をしていても、家庭ではお父さんが吸い、校外のコンビニではお菓子の横でたばこが売られている。矛盾に満ち、子どもたちにはダブルメッセージが投げ掛けられている。しかし、子どもは直感的にたばこが体に悪いことを知っている。だから学校と家庭の中間地点となる地域でたばこ問題と向き合う「タバコフリーキッズ」を進めている。子どもたちが持つ力を育てることで未来への解決策が見つかると信じている。

▲森田桂氏　体験型清掃で「気付き」

石田　子どもがたばこの問題を学ぶことはとても大切だ。ただ教え方が難しい。本当は大人も吸ってはいけないという前提からはじめなければならない。

【基調講演】

海洋汚染とタバコのフィルターについて

石田 雅彦氏

（サイエンスライター、横浜市立大学大学院医学研究科 循環制御医学教室共同研究員）

私は出版の編集者やサイエンス系のライターをしている。同時に大学院の学生でもあり、公衆衛生やたばこ問題を研究している。

たばこの吸い殻やたばこ由来の廃棄物は、世界の海岸で清掃された総廃棄物の19～38％と言われている。たばこは毎年、世界で6兆本も生産され、このうち4兆5千億本がポイ捨てされていると推測される。

吸い殻の行き先考えて

たばこは有害物質の塊。フィルターはそれを吸着する目的で作られたもので、有害物質が染み込んでいる。ポイ捨てされた吸い殻の中には発がん性物質などが入っている。これらは分解されにくく、最長で10数年も環境中に残る。軽くて小さく、浮力があるので雨や風で容易に拡散する。

2017年、日本の海岸で約3・7㌧、約11万個のごみが回収されたというデータがある。一番多かったのはたばこのフィルター。吸い殻の7、8割はまちから来ている。雨水や汚水とともに川から海に行く。たばこのポイ捨てが海を汚染している。

たばこのフィルターは健康被害への懸念を軽減するために作られたものだが、健康被害は防げない。フィルターが付いているから安全という誤解を与えることも問題だ。世界的に喫煙率は下がっているが、人口増によって途上国では喫煙者数が増加。最近は加熱式たばこの吸い殻も増えている。

喫煙者はイマジネーションに欠けている。自分が排水溝などにポイ捨てした吸い殻が、どうなっていくか分かっていないのではないか。ポイ捨てした吸い殻は川を経て海を汚す。回り回って有害物質のヒ素などが飲料水に入れば、我々の体に蓄積し、健康に被害が及ぶ。まちなかの吸い殻がどこに行くのかということを考えて、たばこを規制し、受動喫煙をなくしていくことは、吸う人を少なくすることにつながる。

たばこと同時にポイ捨ても規制し、喫煙者の意識を変え、瀬戸内海を美しいままに保っていただきたい。

高松市屋島西町の浦生海岸でごみを拾い集める参加者

【清掃活動】

1時間足らずの作業で集まったたばこの吸い殻。ライターや紙の容器、加熱式たばこのカートリッジなども交じっていた

ディス全3d（378*100）